

英語のリスニングにおける指導方法と 課題の関連性についての実験的研究

——Summarizing と Note-taking の適用に関して——

飛 田 ル ミ

1. 研究の背景

1.1 英語の学習目標とコミュニケーション能力

平成元年（1989年）に公示された学習指導要領で、「コミュニケーション能力」の育成が外国語（英語）の学習目標として提示されて以来、英語教育の様々な場面において、「コミュニケーション」という言葉が頻繁に使われるようになった。ところが高梨他（1995）は、一般的に「英語におけるコミュニケーション能力」が狭義で捉えられている場合が多いと指摘している。一例として、大学生が「英語におけるコミュニケーション能力」をどのように捉えているのかを確認するために、英語のクラスで毎年実施しているアンケートの集計結果を次に示す。（1999年4月に実施したアンケートからの抜粋である。）

【アンケートの質問】

「英語の4技能で、自分が特に苦手であり、今後最も伸ばしたいと思う英語の技能と、何故伸ばしたいのか理由を書きなさい。」

【学生の回答】

(1) 4技能の集計結果の順位

- ① リスニング (382 名) ② スピーキング (336 名)
 ③ ライティング (126 名) ④ リーディング (43 名)
- (2) 理由 (「コミュニケーション」という言葉を使用して回答している例)
 「ネイティブスピーカーと、日常的なコミュニケーションができるようになりたいから…」
 「コミュニケーションが難なくとれるようになりたい…」
 (*どちらもリスニングを選択した理由として書いている。)

学生にはアンケートを実施する直前に、英語のコミュニケーション過程と 4 技能の関連性について、Krashen (1985) のインプット理論を用いて、「英語におけるコミュニケーション活動とは、4 技能全てが関連し合って成立している。」ということを黒板で図説しておいた。しかし、上記の回答例のように「コミュニケーション」を「英会話」の同意語として捉えている学生が多々見られた。そこで、英語学習における効果的な指導方法を検討する場合は、まず学習目標及びその学習目標に即したコミュニケーション能力の育成について、各々の構成要素を明確にする必要があると示唆される。

高梨他 (1995: 7) は、指導要領などで示されている外国語 (英語) の学習目標は、次の 3 つの要素から構成されていると述べている。

- (1) 外国語 (英語) を理解し、外国語 (英語) 表現する能力を養うこと。
- (2) 外国語 (英語) で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てること。
- (3) 言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培うこと。

本来、学習目標を念頭に置いた英語のコミュニケーション能力とは、「能力」、「態度」および「国際理解」を総合した能力である。つまり、前述のアンケートのように、コミュニケーション能力を、英会話を上手に行う能力と捉えることは、極めて限定された一面で捉えていることを意味しており、このことは英語の授業においても学習者に意識させるべきであるといえよう。そのためには、コミュニケーション能力の構成要素についても再検討する必要があると考えられるが、Savignon (1983) は下記の 4 つの構成要素を提唱している。

- ① 文法的能力 (grammatical competence)
- ② 社会言語学的能力 (sociolinguistic competence)

③ 談話能力 (discourse competence)

④ 方略的能力 (strategic competence)

高梨他 (1995) に基づいて上記の 4 つの構成要素を簡潔にまとめると、各要素は以下の通り解釈できる。

① 「文法的能力」とは文に関する文法的ルールを正しく理解し、実際に使用できる能力である。

② 「社会言語学的能力」とは、発話の適切さを判断できる能力である。発話が社会的文脈において、適切に行なわれているかを判断する能力であることから、異文化コミュニケーションに大きく関わっている能力であるといえる。

③ 「談話能力」とは「文法的能力」が 1 つ 1 つの文を正しく理解し用いることができる能力であるのに対して、パラグラフなどのまとまりのある文章の構成や展開に関係している能力である。この能力は、「コミュニケーション能力」を正しく理解するための基本的能力であり、英語の 4 つの技能 (言語活動) すべてに密接に関わっているので、学習指導要領などコミュニケーション能力の育成を目指す学習目標においては、中心になる能力と言えるであろう。

④ 「方略的能力」とは、岡 (1994) によると、「実際の言語使用」(execution) の中でも特に、スピーキングにおいて重要な役割を果たすとされ、前述の学習目標(2)に深く関わっている能力であると位置付けされている。

英語のコミュニケーション能力を育成するという学習目標を目指した場合、既述のようにまず学習目標を明確にし、その目標に合わせたコミュニケーション能力の定義を見直した上で、効果的な指導方法を試みるのが有用であるといえよう。

1.2 コミュニケーション能力と評価

1.1 で述べたように、英語の学習目標におけるコミュニケーション能力とは、音声を手段とするリスニングとスピーキングに限定するのではなく、英語を聞いたり、読んだりして内容を理解する能力 (receptive skills) と、話したり、書いたりして自分の意志を伝達する能力 (productive skills) を総合して捉えるべきである。そこで、学習者の成果もこれらの能力を総合的

に評価する必要があるといえよう。松畑（1994：13）は、英語学習における目標と評価の観点を一体化させることが、学習指導の効果を上げ、学習者に対し到達目標への方向性を示す上で重要であると指摘し、学習目標と評価を次のように図式化している。

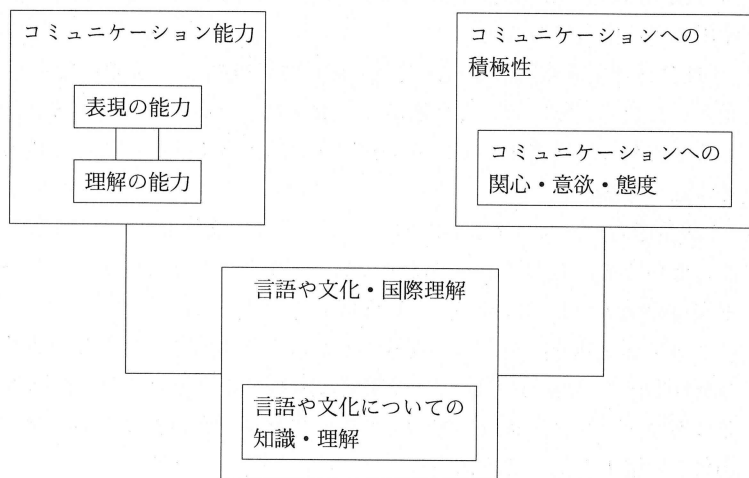


図1 英語の目標と評価の観点の関連図

図1より、コミュニケーション能力は、コミュニケーションへの積極性により育成され、またコミュニケーション能力がコミュニケーションへの積極性を育成するという相補的な関係にあることがわかる。また、言語や文化についての知識・理解は積極的なコミュニケーションを通して育成され、同時にこれらの知識・理解を活用して、コミュニケーションを効果的に図ることができるようになるといえよう。

これらの相関関係を念頭に置き、授業展開に即した診断的評価・形成的評価・総括的評価などの到達度評価（垣田編 1983，大内他編 1985，松畑編 1994）を用いて、段階に応じた適切な評価を行うことが、英語のコミュニケーション能力を育成することを目標とした授業において必要であると考えられる。

1.3 視聴覚教育・教育学の観点から

視聴覚教育・教育学の分野で教育メディアの学習効果を検証した研究において、効果的な学習方法を検討する場合は、単に教育メディアを比較するのではなく、学習過程を形成している主要因である教育メディア、学習者特性、学習課題の3者の関連性を明らかにするべきであるという示唆(TTTI：特性課題処遇交互作用)(大内他編1985)が提示されている。このことは、英語のコミュニケーション能力の育成を目標とした学習過程において、効果的な指導方法を検討する場合にもあてはまる。

飛田(1992)の研究では、英語のリーディングにおいて、メタ認知学習方略と学習者特性との関連性を明らかにする試みを行った。その結果、1つのメタ認知学習方略(Semantic-Map Learning Strategy)と学習者特性(Cognitive Style)との間に相関関係が見られた。さらに、飛田、福田(1999)の研究では、英語のリスニングにおいてパターン認知に焦点を当て、課題(評価方法)と処遇(指導方法・学習活動)の関連性を明らかにする試みを行った。その結果、1つの課題(Comprehension Test)と処遇(Note-taking)の間に相関関係が見られた。

これらの研究結果からも、英語の学習効果を検討する研究において、学習過程の主要因の関連性を明らかにすることにより、効果的な指導方法の検証を行うことは有用であると考慮される。

2. 研究の目的

前述の研究背景から、効果的な指導方法を検討する場合は、教育目標を明確にし、学習過程の主要因を複数取り上げ、適切な評価方法によって検討する必要があると示唆される。そこで、本研究では、前述のアンケートにおいて、学生が最も伸ばしたい技能と考えているリスニングの指導において、飛田、福田(1999)の研究の追実験として、言語理解過程のメカニズムを念頭に複数の指導方法と、課題の違いによる学習効果の差を検討することにより、効果的な指導方法と適切な課題(評価方法)の関連性を明らかにする試みを行なう。指導方法と課題の交互作用を明らかにすることは、学習目標に

対して適切な指導方法を選択するための示唆になるといえるであろう。

3. 研究の方法

3.1 「談話能力」の育成における指導方法の検討

本研究では、1.1 で述べた「談話能力」の育成において、効果的であると考えられる指導方法を検討する。「談話能力」が英語の4技能に深く関わり、コミュニケーション能力の育成を目的とした学習目標において中心的な能力であることは既述である。さらに、高梨（1995：191）は、「談話能力」とリスニングの関わりについて、次のように述べている。

「聞くこと」の言語活動においては、「概念や要点」を的確にとらえる「全体把握の聞き取り」（global listening）が不可欠であり、そのためには、談話能力の育成が必要である。

3.2 情報の処理水準（Level of Processing）について

前述の飛田（1992）の研究において、英語の読解においてメタ認知学習方略の学習効果を検証した際、英語の学習過程には認知心理学の分野で提唱されている、「情報の処理水準（Level of Processing）」が深く関与していることが明らかとなった。リンゼイとノーマン（1983）が提唱する情報処理過程は言語処理過程にもあてはまり、より深い情報処理を行った場合、記憶の再生に優れているという示唆を得ている。さらに、Craik と Lockhart（1972）の研究においては、次のような実験結果が提示されている。

「文章を読みながらその概要を考えなさい。」という深い分析による処理を行わせた学習者と、「文章を読んで、文章中の全ての e の文字を○で囲みなさい。」という、浅いレベルの分析による処理を行わせた学習者の再生テストにおいて、より深いレベルの分析による処理を行わせた学習者のほうが、高い成績を得ることができた。」

また、飛田、福田（1999）の研究では、英語のリスニング指導に関して、認知心理学の分野における「パターン認知」に着目し、概念駆動型（Top-Down Approach）とデータ駆動型（Bottom-Up Approach）の処遇と課題をとりあげて交互作用を検討した。その結果、1.3でも述べたように、概念駆動型として用いた処遇（Note-taking）と課題（Comprehension Test）の間に相関関係が見られた。

これらのことから、英語学習において学習効果を検証する際には、情報の処理過程についても考慮する必要があると示唆される。そこで本研究では、情報の処理水準に焦点を当て、次に挙げる指導方法と課題を設定した。

3.3 指導方法と課題の設定

3.2で示した知見をもとに、本研究では指導方法（処遇）として、飛田、福田（1999）の研究で取り上げた、キーワードをメモさせるという Note-taking と、さらに深い処理水準の作業であると考えられる、Summarizing（要約）（表1）を取り上げる。

課題（評価方法）としては、Dictation（書き取りテスト）と Production（自由記述問題）（表1）を実施する。前記の図1の通り、英語の教育目標と評価にはコミュニケーション能力のみでなく、コミュニケーションへの積極性、および言語や文化理解が密接に関わっていることが指摘されている。そこで、自発的な作業を伴う Production という課題を、評価の1つとして取り入れることにより、コミュニケーションへの積極性、文化・国際理解が評価できると考慮する。

上記の方法により、指導方法と課題の関連性を明らかにすることにより、

表1 処遇・課題と処理システム

指導方法・処遇・学習活動	課題・評価方法	
	課題（評価方法）	
深い情報処理 Summarizing（日本語による要約）	Production （自由記述テスト）	Dictation （書き取りテスト）
浅い情報処理 Note-taking（英語によるメモ）	Production （自由記述テスト）	Dictation （書き取りテスト）

英語のコミュニケーション能力の育成を目的とした学習目標に適した指導方法、および評価方法を検討することは、これからの英語学習において有用であると推測される。

4. 実 験

4.1 実験の目的

本実験では、英語のコミュニケーション能力の育成を目指す学習目標に適した指導方法、および評価方法を検討するために、情報処理システムの処理水準に着目し、指導方法として Summarizing と Note-taking の二つの指導方法を取りあげ、特に下記の①と②について学習効果を明らかにすることを目的とする。

- ① 英語のリスニングにおいて、Summarizing のように深い情報処理を行う指導方法は、コミュニケーション活動への積極性および文化・国際理解に関するコミュニケーション能力の育成を目的とする学習活動に効果的であることを明らかにする。
- ② 英語のリスニングにおいて、Note-taking のように浅い情報処理を行う指導方法は、言語理解に関するコミュニケーション能力の育成を目的とする学習活動に効果的であることを明らかにする。

4.2 仮 説

実験の目的に即して、以下のような仮説を設定した。

仮説 1：英語のリスニングにおいて、深い情報処理を行わせる指導方法は、深い情報処理が必要な課題において学習効果がある。

仮説 2：英語のリスニングにおいて、浅い情報処理を行わせる指導方法は、浅い情報処理が必要な課題において学習効果がある。

上記の仮説を検証するために、以下の作業仮説を設定した。

作業仮説 1：Summarizing を行ったグループは、Note-taking を行ったグループよりも、Production において高い得点が得られる。

作業仮説 2：Note-taking を行ったグループは、Summarizing を行ったグループよりも、Dictation において高い得点が得られる。

4.3 実験の実施

(1) 被験者

被験者は、私立大学経済学部 の 1 年生で、内訳は次の通りである。

表 2 被験者の人数

Summarizing を実施したグループ	Note-taking を実施したグループ	合 計
42 名	41 名	83 名

(2) 実験材料

(a) 教材の内容

Inside Stories U. S. A. 「ビデオで学ぶアメリカ文化」森田彰他著 成美堂
(付記 1)

飛田、福田 (1999) の実験では、聴覚教材を使用した が、本実験では視聴覚教材としてビデオ教材を使用した。1.1 で既述のアンケートの質問に「英語の授業で使用してみたい教材」という項目があり、多くの学生が「ビデオ教材」と回答していたことから、学習意欲を高めるためにも、本実験ではアメリカ文化を紹介したビデオ教材を使用した。

この教材は、アメリカの文化、社会、行事など (「キャンピングカーの生活」、「アーミッシュの生活」、「禁煙運動」、「インターネットビジネス」、「ショッピング」、「ボランティア精神」、「感謝祭」、「クリスマス」) を紹介しているビデオ教材と、語彙問題、内容理解問題などを掲載したテキストを併用する教材である。ビデオ教材は、一つの内容が約 3~4 分 (平均約 490 語程度) で、ナレーションとインタビューにより構成されている。速度はナレーション部分が平均 162 wpm で、インタビュー部分が平均 238 wpm である。

本実験では 2 つのグループに同じビデオ教材を視聴させながら、それぞれ異なった指導方法により学習活動を行い、自由に意見を書かせる Production (付記 2) とビデオ教材のスクリプトから一部抜粋した Dictation (付記 3) を実施することにより、学習効果を検証した。

(b) 指導方法と課題

深い情報処理を行う指導方法として、Summarizing を行うグループには、

聞き取った内容の要約を日本語で書かせた。一方浅い情報処理を行う指導方法として、Note-takingを行うグループには、教材内容のキーワードを英語で書かせた。その際、文法ミスやスペルミスに気をせず自分で重要と思った語句を書き取るよう指示をした。どちらのグループにも、書く量の制限は設定せず自分が書ける範囲で自由に書かせた。

各指導方法の学習効果を評価するために、2つの課題（評価方法）を用いた。深い情報処理を伴う課題（評価方法）としては視聴したビデオの内容に関する質問に対して、英語で3文以上書かせる Production（自由記述式の問題）を実施した。その際被験者には、「細かい文法ミスやスペルミスは減点の対象にはならない。」と告げ、自由に1文でも多く書くように指示をした。被験者が書いた英文の内容により、1文0点から4点で採点し合計点を点数とした。

一方、浅い情報処理を伴う課題としては、視聴したビデオのスク립トから抜粋した Dictation（書き取りテスト）を実施した。被験者が聞き取る部分は単語2〜3語程度で、書き取れた程度により1問0点から2点とし、10点満点で採点した。

(c) 実験の手順

実験は1999年の9月から1999年の12月にかけて大学経済学部1年生の2つのクラスで、11週にわたり実施された。実験の流れとしては、9月第4週に事前テストを実施し、被験者の等質性を確認した。10月第1週から、12月第2週まで10回の授業において、同一教材を用い、異なった指導方法による授業活動を行った。11月の第2週に途次段階として中間テストを、12月の第3週に事後テストを実施し各指導方法の学習効果を確認した。

ビデオ教材は合計2回流した。1回目の視聴の際に、Summarizing, Note-takingを行わせるため、2〜3文流した後に約30秒のポーズを入れた。ポーズの間に、それぞれの作業をできるだけ完成させるように指示をし、2回目はポーズを入れず最後まで通して流し、1回目の視聴で聞き取れなかった部分を補足するように指示をした。

中間テストと事後テストを実施した際は、ビデオ教材を2回視聴させ、それぞれの指導方法で学習活動を行った後、もう一度ビデオを視聴させて各テ

英語のリスニングにおける指導方法と課題の関連性についての実験的研究

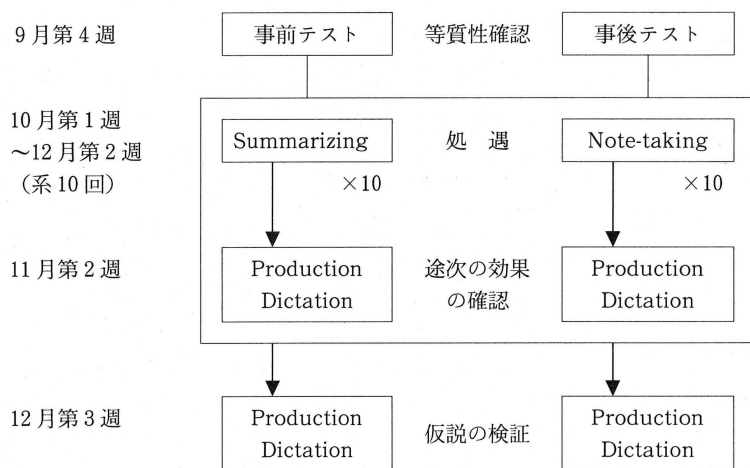


図2 実験の流れ

ストを実施した。テストの際は、一切メモをとることを禁じ視聴のみとした。具体的な実験の流れは図2の通りである。

4.4 分析方法

- グループの等質性：事前テストとして、ビデオを視聴させた後、テキストの内容理解に関する問題（Comprehension Question）（2点×5問で10点満点）と Dictation（2点×5問で10点満点）を実施し、その平均値の差の検定により等質性を調べた。
- 作業仮説1の検証：各グループで11月の第2週、および12月の第3週に実施した Production の得点に関して、平均値の差の検定を行った。
- 作業仮説2の検証：各グループで11月の第2週、および12月の第3週に実施した Dictation の得点に関して、平均値の差の検定を行った。

4.5 実験の結果と解釈

(1) 分析の結果

- グループの等質性の分析結果：事前テスト（9月第4週実施）

表 3 事前テスト（内容理解テスト）の得点の平均値の差の検定

	被験者数	平均値	標準偏差値	t 値
Summarizing	42	6.643	2.302	0.442
Note-taking	41	6.780	2.374	

p=n.s.

表 4 事前テスト（Dictation）の得点の平均値の差の検定

	被験者数	平均値	標準偏差値	t 値
Summarizing	42	5.976	2.283	0.129
Note-taking	41	6.024	1.675	

p=n.s.

表 3, 4 の分析結果から、内容理解テスト、Dictation の両者において、平均値の差に有意差は見られず、よって被験者の等質性が確認された。

(b) 作業仮説 1 の検証：中間テスト（11 月第 2 週実施）

表 5 中間テスト（Production）の得点の平均値の差の検定

	被験者数	平均値	標準偏差値	t 値
Summarizing	42	12.452	4.360	4.147
Note-taking	41	9.195	5.696	

**p < .01

(c) 作業仮説 2 の検証：中間テスト（11 月第 2 週実施）

表 6 中間テスト（Dictation）の得点の平均値の差の検定

	被験者数	平均値	標準偏差値	t 値
Summarizing	42	8.404	4.123	2.364
Note-taking	41	7.000	3.482	

*p < .05

表 5, 6 の分析結果から、Production において 1%水準で、Dictation においては 5%水準で平均値に有意差が確認された。つまり、学習活動として

英語のリスニングにおける指導方法と課題の関連性についての実験的研究

Summarizing を行ったグループは、Note-taking を行ったグループよりも、2 種類のテスト（課題）において高い得点を得ているということが明らかとなった。

以上の分析結果から、中間テストの得点に関しては、作業仮説 1 は支持され、作業仮説 2 は支持されなかったと考慮される。

(d) 作業仮説 1 の検証：事後テスト（12 月第 3 週実施）

表 7 事後テスト（Production）の得点の平均値の差の検定

	被験者数	平均値	標準偏差値	t 値
Summarizing	42	16.000	4.567	5.815
Note-taking	41	12.317	3.523	

**p < .01

(e) 作業仮説 2 の検証：事後テスト（12 月第 3 週実施）

表 8 事後テスト（Dictation）の得点の平均値の差の検定

	被験者数	平均値	標準偏差値	t 値
Summarizing	42	8.214	1.473	7.623
Note-taking	41	6.268	1.808	

**p < .01

表 7, 8 の分析結果から、Production, Dictation の両者において 1%水準で平均値に有意差が確認された。中間テストの結果と同様に、学習活動として Summarizing を行ったグループは、Note-taking を行ったグループよりも、2 種類のテスト（課題）において高い得点を得ているということが明らかとなった。

以上の分析結果から、事後テストの得点に関して、作業仮説 1 は支持され、作業仮説 2 は支持されなかったと考慮される。

(2) 実験の結果のまとめと解釈

前述の(1)における分析結果を、仮説に従ってまとめ、それぞれについて解釈、検討を次のように行った。

1. 「仮説1：英語のリスニングにおいて、深い情報処理を行わせる指導方法は、深い情報処理が必要な課題において学習効果がある。」を検証するため、深い情報処理を行わせる指導方法として Summarizing を用いたグループにおける中間テストによる途次の学習効果と、事後テストによる継続的な学習効果について、深い情報処理を必要とする課題である Production を実施した。その結果、仮説1は、中間テスト、事後テストにおいて支持された。よって、Summarizing という指導方法が、英語のリスニングの「談話能力」の育成において、学習効果が認められたと示唆される。また、学習効果を評価する課題として、「コミュニケーション能力」のみでなく、「コミュニケーションへの積極性」、「言語や文化・国際理解」についても吟味した、Production の適切性が確認できたと考慮される。
2. 「仮説2：英語のリスニングにおいて、浅い情報処理を行わせる指導方法は、浅い情報処理が必要な課題において学習効果がある。」を検証するため、浅い情報処理を行わせる指導方法として Note-taking を用いたグループにおける中間テストによる途次の学習効果と、事後テストによる継続的な学習効果について、浅い情報処理を必要とする課題である Dictation を実施した。その結果、仮説2は、中間テスト、事後テストにおいて棄却された。さらに、中間テスト、事後テストの Dictation 両者において、Summarizing を実施したグループの平均点に有意差が認められたことから、今回の実験においては、浅い情報処理を行わせる指導方法よりも、より深い情報処理を行わせる指導方法の方が、「言語理解に関するコミュニケーション能力」の育成を目的とする学習活動においても、学習効果を確認できたことを示唆していると言えよう。よって、浅い情報処理を行わせる指導方法と、浅い情報処理が必要な課題における相関関係は認められなかったと考慮される。

5. 研究の考察

5.1 研究のまとめと考察

実験の結果から得られた知見をもとにして、次のような考察が得られた。

(1) 指導方法に関して

(a) 深い情報処理を行う指導方法と課題

実験において仮説1が支持されたことは、深い情報処理を行う Summarizing のような指導方法は、英語の談話能力を育成する目的に適した効果的な指導方法であると示唆された。また、仮説2が棄却され、深い情報処理を行う指導方法が、浅い情報処理を必要とする課題に対しても効果が認められたことから、言語理解に関するコミュニケーション能力の育成においても、効果的な指導方法であると言える。

また深い情報処理を必要とする Production のような課題については、深い情報処理を行う指導方法の学習効果が実証されたことにより、指導方法と課題の関連性が認められたこととなる。よって、英語の総合的なコミュニケーション能力の育成を目指す学習過程において、有効な評価方法であると示唆される。

(b) 浅い情報処理を行う指導方法と課題

実験において仮説2が棄却されたことは、浅い情報処理を行う Note-taking のような指導方法が、本研究で浅い情報処理が必要な課題として取り上げた Dictation において、深い情報処理を行う指導方法と比較した場合に、学習効果が低かったと解釈するべきであると考慮される。また、Note-taking と Dictation の間に相関関係が見られなかったということは、Dictation が Note-taking の学習効果を評価する課題として適切ではなかったことを示している。しかしながら、Note-taking を実施したグループの Production の得点を、中間テストと事後テストにおいて比較した場合、得点に伸び率が確認できることは、Note-taking の学習効果が評価されたと判断される。このことから、今後さらに浅い情報処理を行う指導方法と課題との関連性は検討するべきであると言える。

また本実験においては、Note-taking を Summarizing と比較した場合に、「より浅い」情報処理を行う指導方法という意味で、「浅い」という言葉を用いた。しかし、前述の Craik と Lockhart (1972) の研究においては、「文章を読んで、文章中の全ての e の文字を○で囲みなさい。」という、本実験で取り上げた Note-taking よりもかなり浅いレベルの情報処理を行わせて

いた。そこで、認知心理学の分野における処理水準のレベルについても、再度検討する必要があると考えられる。

5.2 今後の研究への示唆

(1) 指導方法と課題の関連性について

等質性が認められた二つのグループにおいて、同一教材を用いて実施した指導方法の学習効果が、課題によって異なった評価が確認できたということは、英語の学習過程において、評価方法の選択をよく吟味する必要があると示唆される。学習目標に適切な指導方法を明らかにする研究においては、今後あらゆる指導方法と、その学習効果を適切に評価する課題との関連性を追求することは有意であると推測される。

(2) 情報の処理水準レベルについて

本研究においては、認知学習理論に基づいた情報の処理水準レベルに焦点を当てて、指導方法の学習効果および課題との関連性を検討した。しかし、情報の処理水準は内面的な要因に帰属していることから、各指導方法が実際にどのレベルで情報処理を行っているかということを観察するのは不可能である。しかしながら、学習過程は情報処理過程の一環であることから、あらゆる指導方法について、処理水準との関連性において検討することは意義があると言えよう。

(3) 学習者特性と教材内容について

今回の実験では、教育工学の分野で示唆されている学習者特性は取り上げなかったが、指導方法の学習効果は学習者特性に大きく依存しているといえよう。今回使用した教材は、アメリカ文化を紹介したビデオ教材であったが、実験後に実施したアンケートによると、学生が興味を持ったトピックは、個人によって異なっていた。今度は、学習者特性や学習意欲等を考慮に入れて、指導方法と課題の関連性を明らかにしていくことが望まれる。

(4) 今後の展望

本研究で英語のリスニングにおける深い情報処理を行う指導方法との学習

効果、及び課題との関連性が検証されたことは、総合的なコミュニケーション能力の育成を目指す学習目標に適した指導方法、及び課題の研究に示唆を与えることとなり、意義があると考えられる。しかし、前述のように問題点や課題が残されていることから、本研究から得られた結果を一般化することはまだ難しいと予想される。今後の実証的な研究の累積において、効果的な指導方法と課題との関連性を少しずつ明らかにすると共に、効果が検証された指導方法に関しては、あらゆる学習場面で実践されることが期待される。

参考文献

- Block, E. 1986. "The comprehension strategies of second language readers." *TESOL Quarterly* 20: 463-494
- Carrell, P. L. 1983. "Three components of background knowledge in reading comprehension", *Language Learning* 33: 183-207
- Craik, F. I. M. and Lockhart, R. S. 1972. "Level of processing: A framework for memory research." *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 11: 671-684.
- Krashen, S. D. 1985. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. London: Longman.
- Krashen, S. D. 1986. "The Input Hypothesis: Issues and Implications." *TESOL Quarterly* 20: 116-122
- Savignon, S. J. 1983. *Communicative Competence: Theory and Classroom Practice*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- アンダーソン, J. R. 1989 富田達彦, 増井透, 川崎恵理子, 岸学(訳)『認知心理学概論』誠信書房
- 大内茂男, 高桑康雄, 中野照海 (1983)『視聴覚教育の理論と研究』日本放送教育協会
- 太田垣正義 (1999)『英語教育学・理論と実践の結合』開文社出版
- 岡 秀夫 (1994)「スピーキングとオーラルコミュニケーション」小池生夫監修『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店
- 垣田直巳監修, 三浦省五編集 (1983)『英語の学習意欲』大修館書店
- 小池直己 (1988)『英語教育の実践研究』南雲堂
- 高島英幸 (1995)『コミュニケーションにつながる文法指導』大修館
- 高橋正夫 (2000)『英語教育学概論』金星堂
- 高梨庸雄, 緑川日出子, 和田稔 (1995)『英語コミュニケーションの指導』研究社出版
- 飛田ルミ (1992)「外国語学習の読解におけるメタ認知学習方略の適用に関する実験的研究」国際基督教大学大学院教育学研究科
- 飛田ルミ, 福田有美 (1999)「英吾のリスニングにおける課題と指導方法の関連性

についての実験的研究』『Language Laboratory』第36号, pp.117-128
橋本満弘, 石井敏編『英語コミュニケーションの理論と実際』桐原書店
松畑熙一編(1994)『英語コミュニケーション能力 評価事例事典』大修館書店
リンゼイ, P. H., ノーマン, D. A. 中溝幸夫, 箱田裕司, 近藤倫明(訳)(1983)
『情報処理心理学入門 II: 注意と記憶』サイエンス社
リンゼイ, P. H., ノーマン, D. A. 中溝幸夫, 箱田裕司, 近藤倫明(訳)(1986)
『情報処理心理学入門 III: 言語と思考』サイエンス社
渡辺時夫, 森永正治, 高梨庸雄, 斎藤栄二(1988)『インプット理論の授業』三省
堂

【付記1】

Making a Living on the Internet

From this small New York office, a radio program is being broadcast. This is an internet radio station, and it requires only limited equipment. Using the Internet, one can send information around the world almost instantaneously. The emergence of the Internet is beginning to have a large impact on American society. (以下省略)

【付記2】

Production

ビデオを見て次の問い, 英文で答えなさい。ただし, 最低3文以上とする。
Q: あなたはビデオに出てきた, CDをインターネット上で販売する家族をどのように思いましたか? また, あなただったらこのCDショップを利用しますか? 利用する場合, しない場合, どちらもその理由を書きなさい。

【付記3】

Dictation

From this small New York office, a radio _____. This is an internet radio station, and it _____. Using the Internet, one can send information around the world almost instantaneously. The emergence of the Internet is beginning to have _____ on American society. (以下省略)